

書評：ディールス・クランツ (DK) からラクス・モスト (LM) へ  
リヴィオ・ロセッティ Livio Rossetti (ペルーシア大学)

Laks, A.-Most, G. W. — *Early Greek Philosophy*, in 9 vols., Cambridge MS 2016  
(Loeb Classical Library 524-532).

Laks, A.-Most, G. — *Les débuts de la Philosophie, des premiers penseurs grecs à  
Socrate*, Paris 2016.

ソクラテス以前の「哲学者たち」についてのテキストと証言を集め、ディールス・クランツの名で知られてきた資料集は、1903年に始まり1952年までアップデートされてきた。その資料集は直ちにこの分野の権威となり、特典として、それを克服しようとする数々の試み（近年のグラハム D.W. Graham 編『初期ギリシア哲学のテキスト集』*The Texts of Early Greek Philosophy*, Cambridge 2010、ポルテュラス J. Pórtulas とグラウ S. Grau 編『古代ギリシアの知恵』*Saviesa grega arcaica*, Barcelona 2011、マンスフェルト J. Mansfeld とプリマヴェシ O. Primavesi 編『ソクラテス以前の哲学者たち』*Die Vorsokratiker, Griechisch-Deutsch*, Stuttgart 2012 を含む）を難なく超えて生き残ってきた。DK 断片集のこうした耐久性は偶然のものではない。それが110年以上も前に出版されており、その間に多数の出版物が数多くの新しい事実を伴って作成されたという事実にもかかわらず、この著作は「人間の限界内における」正確さと信頼性の象徴であると、誰もが一致して認めてきたのである。

だが、この状況は9巻の小型本『初期ギリシア哲学』*Early Greek Philosophy*（ハーバード大学出版局のギリシア・ラテン語テキストの権威あるローブ古典叢書に収められている）の出版、それと並行して、アルテム・フェヤールからパリで出版された『哲学の始まり』*Les débuts de la philosophie*によりようやく変わった。どちらも、入手可能な情報の選択と構成は、アンドレ・ラクス André Laks（前ソルボンヌ大学教授で、今はメキシコシティのパンアメリカナ大学教授）<sup>1</sup>とグレン・W・モスト Glenn W. Most（ピサ高等師範学校とシカゴ大学の教授）<sup>2</sup>が、ジェラルド・ジョルネ Gérard Journée、レオポルド・イリバッレン Leopoldo Iribarren、デイヴィッド・レヴィストーン David Levystone ら数名の研究者の協力の下で行った。この9巻の校訂版は総計4,200ページにも及び、フランス語版もやや大型の版型で1,650ページを超える。この著作で状況が変わったというのは、今やDKの代わりにLMで引用することが可能に、いや、当然となったからである。あと数年間は、LMと並んでDK番号を使い続けることが避けられないにしても。

その「序言」でラクスとモストは、「私たちはこの校訂版が専門家にとって有益となることを期待しているが、主要な意図はより広い一般の読者に初期ギリシア哲学に関して私たちがもつ情報を提供することにある」（第I巻5ページ）と述べているが、これはDKに代表される先行業績の偉大さを前にした敬意や謙遜に過ぎない。

<sup>1</sup>1950年生まれ。ジャン・ボラックの弟子でアポロニアのディオゲネスの研究から始める。リール大学、プリンストン大学などで教鞭をとり、モストとは1993年のテオフラストス『形而上学』編集（ビュデ版）以来協力態勢にある。

<sup>2</sup>1952年アメリカ合衆国生まれ。ハーバード大学出身の古典学者・比較文学研究者で、ドイツやイタリアでも教鞭をとってきた。

い。少なくとも評者の意見では、そのような宣言に欺かれる者はいない。これは新たなDKなのである。

この本は私たちに（私の数え方が正しければ）3,600程の単元のテキストを提供しているが、その各々は原語（時に、ラテン語、ヘブライ語、シリア語、アルメニア語やアラビア語）で提示され、テキストを確立する上で生じる疑義に関しては、適切に選択された注記が加えられている。また、慣例の作法に従い、断片に限定されずに対訳（英語）が付されている。テキストの単元は、タレス、アナクシマン드로ス、アナクシメネス、ピュタゴラスとピュタゴラス派、ヘラクレイトス、パルメニデス、ゼノン、エンペドクレス、デモクリトス、プロタゴラス、ゴルギアス、等々と続く。DK断片集では90章あったものが、本書では43章（もしソフィストを数えなければ30章）になっている。他方で、グラハムは章の選択を20まで限定し、ポルテュラスとグラウは26章（ただし、パルメニデスまでの時期）、マンスフェルトとプリマヴェシは12章（この場合、より精緻にできない形式的な計算で）である。従って、DK断片集にはマイナーと考えられる著者が含まれるが（ペトロン、イッコス、メネストル、クレイデモス、イダイオスら）、彼らはLMには含まれない。これは合理的な選択だと思われる。他方で、LMはホメロス、ヘシオドス、テオグニス、ピンダロスや他のいわゆるアルカイック期の詩人たちからの大きな選集に始まり、それに対応する悲劇と喜劇のテキストの概観で終わる。これらは、DKや他の比較可能な資料集との関係で、重要な二つの革新である。アルカイック期の詩を見本にした後、「慣例の」タレス、アナクシマン드로スらに移るが、ヘラクレイトスの後にはピュタゴラスとピュタゴラス派の広範囲で分節化された章が続く。この章（フランス語本で190ページ、ローブ版で第4巻の全体、450ページほど）は全体の中で最長の部分である（次に長いのはエンペドクレスで160ページ、ローブ版420ページ）。新たにエントリーした部分には、学説誌と「系譜」（ヘレニズム時代に作られ不安定な状況を生き残った歴史記述）についての有用な章、医学文献からの豊かな選抜、そしてデルヴェニ・パピュロス（イタリア人研究者ヴァレリア・ピアノが協力）が含まれる。これらの選択はすべて、極めて適切である。

ソクラテス以前の哲学者たちを提示するにあたり、LMはDKを参照するが（それ以外の仕方は考えられなかった）、大いなる知的な自由さをもってその素材を始めから終わりまで再検討している。可能な場面では、各著者について資料は3つの部分に分割されている。その哲学者の性格や伝記に関わるものはP、教説に関わるものはD、影響や後世の議論はRである。ヘラクレイトス、エンペドクレス、デモクリトスに付けられたR部は顕著に豊富であるが、メリッソスに捧げられた章もかなり大きい。誰もが評価する顕著な利点は、著作全体を優れた建築物のように構成するという決定であろう。その建造物では、一連のサブタイトルが基本となってそれぞれの章の見取り図や構造を支え、同類の情報を多数の小グループへと整理していく。この仕方で、何か特定のものを探す作業は格段に容易になっているが、それは、グループやサブグループごとに記事を特徴づけるのに使われる短いタイトルの一覧表が、各章の始めに提示されるからでもある。この形式は有効に機能し、情報を秩序だてて用いるのに多大な利点を備えており、それゆえ、導入の初期段階を容易にするだけでなく、とりわけ、ソクラテス以前の哲学者たちの多く（例えば、パルメニ

デス)の作品が備える百科事典のような性格に、前例のない可視性を与える利点を持つ。

情報を特権化して提示する選択は、必ず付随効果を生む。まず最初に、断片を太字(ボールド)で示すことで、検討主題の元に断片や証言を提示することが正当化されるが、他方で、その際に多くのより関連の薄いテキスト、特に断片がはめ込まれた地の文が省略される(価値が認められた場合、それらのテキストもR部に再現されることはある)。この方針は実際一つの選択であり、ある基準を表明するが、対案がないものではない。例えば、R部では、LMが断片を提示する際に省略した文脈の情報を、もっと気前よく提供することができたかもしれない。

もう一つの顕著な革新は、まったく別の性質のものだが、ソクラテスを扱う章を含めたことである(第VIII巻、ソフィスト1、第33章)。1世紀以上にわたって私たちは「ソクラテス以前の哲学者」について語り、このレッテルによってソクラテスを彼ら全てから切り離すことを習ってきた。私たちは、彼が「ソフィスト」と呼ばれる人々が活躍するその同時代に活躍していて、決してその後ではないことを知っていたのであるが。いや、ラクスとモストは、私が間違っていなければ、今まで誰一人行わなかったこと、つまり、ソクラテスに当てる章をこの資料集に含めることをあえて行ったのである。この選択は、ソクラテスを「ソクラテス以前」の一人にしてしまう(「プラトン以前」と言うのなら、実際にそうだが)という点では、やや奇妙である。にもかかわらず、プラトンやその同時代人の見方に基づくのではなく、前5世紀の見方を適用して—それは正しいやり方だ—ソクラテスを表そうとする強力な励みになるという理由で、この扱いは衝撃的である。私たちは、ソクラテスの死後数十年にわたって多くの著作で描かれた「ソクラテス」が正しいと受けとる義務から解放されたかのようなのである。私は、ラクスとモストがこの道程に踏み出したが、一步に過ぎないという意見である。実際、資料はほとんどがプラトンのテキストから選択されており、『ソクラテスの告発』を書いたポリュクラテスに関する証言には完全に沈黙しており、スフェツトスのアイスキネスやパイドンの証言には価値を認めず、クセノフォンのテキストはほとんど使っていない。

だが、最も困難なのは始めることであり、第一步を踏み出せば、その後、さらなる数多くの歩みははるかに容易になる。要するに、私はこの特定の革新がとりわけ重要な効果を生み出すものと信じているが、それは、ラクスとモストが選択したり省略したりした素材というより、彼らの選択がソクラテスを前5世紀の非哲学者たちの間に位置付け、その結果、一群のソクラテス対話篇がどれほど別の時代(つまり、その著者の時代)を代表するものかを明示するという、その明瞭さゆえなのである。

最後に、二つの周到な補遺の存在を指摘したい。まず、一つはこの資料集に登場する200を超える人物—著者(つまり、その著作が引用される元)であれ、人物(その人について書かれる対象)であれ—についての情報に当てられている。しかしながら、人物は過度に選択されており、彼らが登場する箇所が明記されていない点は残念である。もう一つの補遺は語彙集で、良質で有用なものである。他にもいくつかの補遺が付いている。

とにかく、より重要な結果は、これまで挙げてきたどの点でもない。それは、これほど野心的な目標を達成したことであり、これほど膨大な量の記録をコントロール下に置くのに成功したことである。

何か欠陥はあるのか？ 私は、もし何かあるとしてもうまく隠れていて、それを探し出すのは大変だと言いたい。なんであれ人間的なものに欠陥は付き物であり、何よりも、多様な読み手の期待を満足させるのは不可能なのだから、欠陥が存在するのは明らかである。より重大な欠陥は、疑いなく、出典索引がない点であるが、それは第2版で解決されるものと期待したい。実際、見事に作られた LM と DK の対応表（第1巻所収）に頼ることもできるにしても、もし一まとまりのテキストに挿入や省略があるかを確認しようとする、その企ては必然的に困難なのである。

さらに、省略箇所については（私はテキストの確立とその翻訳に関しては何も言わないが）、章に含める資料を制限する編者たちの傾向を考慮しても、長大なリストを編集することは可能であった。以下の節で、評者の専門分野に関するいくつかの省略箇所を指摘しておきたい。

タレスを扱う第5章で、レスボスの詩人アルカイオスによる言及に—DK はその情報を 11A11a で私たちに与えた事実にもかかわらず—触れられていない。また、七賢人の集まりを形成する前にアテナイ市がタレスを賞賛した「知者」という称号についても、一切言及がない。しかし、これらはタレスが生前に達成した名声、及び、前 580 年頃のアテナイの政治文化の両者を結びつける詳細な事実なのである。「天文学上の諸発見」の領域はかなりの部分を割いて詳細に扱われているが、年の部分に関してはたった一片の情報しか与えてくれない（5R25）。同様に重要な秋分とプレイアデスの日没の間隔に関する詳細は、やや外れた場所ながら 5R21 に登場するが、しかし、至と分の間隔の不均衡な長さ（これは、両者の正確な日付を計算する学識の能力を含意する）についての情報を強調しておくことは可能であるし、望ましかったろう。この情報は代わりに、関係のない 5R16 で、太陽に関する言及と特徴づけられる一連のテキスト内に置かれている。さらに、タレスの「人生への態度」（フランス語本 140 ページ、ローブ版 218 ページ以降に登場するサブタイトルの一つ）との関係で、埋葬に関する彼の考えについて、DK の 11A13 (=Th 318 Wöhrle) にある情報を与える必要があったろう。

パルメニデスを扱う第19章では、チェッリ版の断片 20（ボエティウスが語るアメニアスの称賛）への沈黙が目立つ。いわゆるアルカイック期に属する著者が（エンペドクレスによるパウサニアスの言及のように）誰かを称賛する決意をするのは稀でないにしても。この同じ省略がグラハム、ポルテュラスとグラウ、マンスフェルトとプリマヴェシの資料集でも生じていることは、この証言を無視してよい理由にはならない。さらに、孤立して登場する新語を指摘する方法が確立されるなら、私たちは少なくとも *alogon*, *pseudophanēs*, *hudatorizon* といった語が太字で印刷されているのを期待する。あれこれの新語の出所について編者の意見がどのようなものであれ。

ゼノンを扱う第20章は、1936年に出版された H.P.D. Lee の資料集 (*Zeno of Elea*, pp. 12-63) と比べてもかなり短すぎるように見える。そのリーは、偽アリストテレス『不可分の線について』の関連箇所（実際に同類でも重複でもない）を探しても無駄だと断言するほど選択的だったので、なおさらである。それらの箇所は LM に

も含まれていない（DKに一箇所だけ引用がある）。別の遺漏は、ジョン・ディロンが1974年に指摘した有名な箇所に関するもので、そこでプロクロスが明白に、ゼノンが対角線について語ったと言及している。それは、ゼノンがその術語に言及し、定まった入手可能な概念として取り扱うことができたと証明する事実なのである。

プロタゴラスを扱う第31章では（DK以外、グラハムらの資料集で対応する章でも同様であるが）私たちは「報酬をめぐる裁判」、すなわちプロタゴラスがエウアトロスと交わした論争についての章句を見出したかった。その逸話は完璧に拮抗した反論術と決定を許さない問題状況の例として、まさに典型的なものなのである。驚いたことに、ディオゲネス・ラエルティオスに見られる短い要約すら排除されている。

さらに、二人の編者が「多元論者たち」やアルケラオスやアポロニアのディオゲネスや医学文献テキストやデルヴェニ・パピュロス（これらは単一の体系でも明白に哲学テキストという訳でもない）に言及する際に、なぜ「より後の時代の哲学体系」と呼ぶ決断をしたのか、困惑させられる。その一方で、全てではなくいくつかの医学文献とそのパピュロスだけが、前5世紀より後のものなのである。

これらの評言がこの著作の利点を曇らせるものでは決してないことは言うまでもない。これこそ、ソクラテス以前の哲学者たち（いや、ソクラテスを含む、プラトン以前の哲学者）の研究に向き合おうとする者には誰でも、すぐに不可欠のものとなる本なのである。結論として、もし1,060ページにもものぼる情報豊かな『古代哲学1、初期ギリシア哲学』*Die Philosophie der Antike, I, Frühgriechische Philosophie*（フラスハールFlashar、ブレマーBremer、レヘナウアーRechenauer監修、Basel, 2013）を考慮する時、ソクラテス以前の哲学者たちの研究が今や、最先端で非常に優れたプロフェッショナルの手による資料に頼ることができるため、新たな基盤の上に進展する局面にあると、私たちは自信を持って言うことができる。

（納富信留訳）

\*この書評（Non più DK ma LM）はイタリア語で書かれ、フランス語、スペイン語、ドイツ語、英語にも訳されて発表されているが、ここではイタリア語・英語版に依拠して折衷的に訳した。